千正
新板

女訓百人一首

全

ゆくとしの
秋をさそふて
九重ふかよ代
いろさえ人ぞの
ゆくすゑぞ

玉津島大明神 紀朝
わうせいの
しんぎをうけ
けうくんの
こゝろのなぐさ
みとなるべし

住吉大明神 摂津
むつまじ
えんあらばや
偽こうの
久しき代より
いとひをめでき

人丸大明神 播州
あしびきの
やまどりのを
しだりおの
ながながしよを
ひとりかもねん
百人一首之内

天智天皇
秋の田の
かりほの
いほの
とまを
あらみ
わが衣手は
つゆにぬれつつ

持統天皇
まろすきて
たつさふ
けし
白たへの
ころもを
ほしたり
あまもとの
かぐ山

柿本人麿
あしびきの
やまどりの
尾ろの
しだり
をを
ながなが
しよを
ひとりかもねん

山賤の赤人
田子の浦ゆ
うち出でて
見れば
真白の
富士の高嶺に
雪は降りける

猿丸大夫
奥山の
紅葉踏
なく鹿の
声聞くときぞ
秋は悲しき

中納言家持
鶴はまことの
鶴ぞふけゆく

安濃仲麿
天地ふり
さけ
ゝまとバ
ゆきぞ
ふる
ゝうさの山ふ
そー月うも

森撰法師
我屋も
和の
きつ
を
廉そ但
よ城うぢ山
と
人きいふなり

小野小町
紀乃色を
うつりふ
ながめ
いたづら
よ
我身よ
ふる
ながめ
せしまに

蟬丸
あまこやとの
ぬくも
ゆるも
つもられて
あるふも
あふぬも
あふさうれせき

参議篁
和田の原
八十島
かけて
漕出ぬと
人にはつげよ
あまのつりぶね

傷心遍路
三津の野
雲乃
ゆふぎり
如さとぎよ
乙女もそゝる
赤ぞーとぞわん

陽流院
親ぞ祢の
峯より
ちつるみな
の川
袁ぞ
たゆとて
淵やぞ
ゆる

河原左大臣
みちのくにかよふあふさかの
ぬまぶくれ
くもぢより
雑ゆへす
こぐまそゆ
ひとなしかくよ

光孝天皇
君がため
春の野に
出でて
若菜つむ
我が衣手に
雪は降りつ

中納言行平
立ちわかれ
いなばの
山の
峰に
まつ
とし聞かば
今かへりこん

在原業平朝臣
千早振
神代も
きかぬ
たつたがわ
からくれなゐに
みづくくるとは

長恨歌
但乃江の
岸辺の
浪
なるさえや
長のよひぢ
人わよくらん

伊勢
難波なる
うらぶれ
竹の子
のまも
あそこれば
ゐてよとや

元良親王
いびねをべ
今
ぞうさ
おもひ
なき
恋をはくしてる
あれむとぞ思ふ

素性法師
今とむと
いひし
ばかり
長月の
有明の月を
待出たるかな

文屋康秀
吹つらに
秋ぬ
草木の
露ちるべ
むべ山風を
あらしといふらん

大江千里
月見れば
ちぢに
わがこの
わがみひとつの
秋にあらねど

菅家
東路の
ぬさも
手向
神のまふく

三條左大臣
名にしおはば
山乃
さくらづら
人ふきまよ
くるよしもがな

貞信公
をぐら山
峰のもみぢ
心あらば
今一度のみゆきまつらん

中納言兼輔
みかの原
わきて
流るる
いずみ川
いつみきとてか
恋しかるらん

源宗于朝臣
山がつの
垣ねにさびし
まさりける
人めも草も
かれぬと思へば

凡河内躬恒
心あてに
おらばや
おらん
白菊の
花もまどはせる
白菊の花

壬生君岩
有明はつを
なく
ふくし
別を
あうきだう
うれをのハかし

坂上是則
有明
の
月とる
まで
よ
よのさと
ふ
まるらむ

春道列樹
山川は
風よりも
かけしる
ながれ
なかれ
ながれ
ながれ
ながれ

紀友則
久かたの
ひかりの
どけさ
春の日に
しづこころなく
花のちるらん

後京奥風
誰をうゑし
人よむ
高砂の
松もむかしの
友からなくに
紀貫之
人はいざ
心も知らず
故郷は
花ぞむかし
の香に匂ひける

清原深養父
夏は夜も
まだ宵
なから
明ぬるを
くもいづこに
月やどるらん

文屋朝康
白つゆ
風の吹
しく
秋
乃はぎ
はらぬき
とゝめ
置そちりける

右近
忘られ
ぬとは
思ふぞ
整ひて
人は命の
わすれぐさ

参議等
あさぢふの
をの篠
恐ぶ
まで
なまりて
なとう
人の恋しき

平兼盛
あけぶすまとて
色よ
出ふくろう
ヨウ寒い
物やおもふと
人はとふまで

壬生忠見
恋もそふ
ヨウ
命や
まぐろ
ヨウ
人にれば
おのひそめしが

清原元輔
賀きやうく
えよ
紙を
とりて
すゑのまつ山
なこそおしけれ

中納言敦忠
あひそめ
ぬるの
ちり
ぬらんまこと
むすこ
れもいざまろり

菊五郎
金平の
あくば
かくふ
人をも
風をも
うらみざるまし

謙徳公
あつと
もいふ
べき
人へ
ちもゝえ
ぬけいろづく
りねべきう形

曽祢好忠
世間のとを
流るる
ふる人
ゆぢをさへ
ゆくあとも知ぬ
恵乃友うれ

恵慶法師
金むぐら
おもる
やどの
さびしきを
人ぞとふべき
あきの来よりも

源重之
風とゝくこゝ
岩うつ
なみの
おのをれて
くだけて物を
おもふこゝろか

大中臣能宣
御垣守
衛士の
火の
炎もえて
ひるは消つ
物をこそ思へ

おのてゝ後ハ
海邦のうゝまり
わハぬわどハ
いのちハもうゝく
あひてくおひひ
いのちあまたこと
あひてゝらん
ぐうゝをいのち
うゝきゝうゝまり

蓬原長者
君ゝ
ゝゝ
ゝゝ
命さへ
くもゝ
おのひゝるゝれ

此あゝろハかくとゞふハゝく
ともハゝいハゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝまりゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝまりゝゝゝゝゝゝ
ゝかをつけてかんかんして
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝまりゝ

蓬原宝物語
ゝくとゞふ
ゝハゝハ
いのべき
さゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

あのころいのちの
わしとのうこうり
わけそらを
そくてうでをへ
ちりこまこともんが
わりんがのうこ
りをいるをうこ
ゆーをわさがけこへ
よくーしーうり
義家遠征
奥ねをむ
まる
ねとへ
ちまがら
なぜうらわりき
ぼりまう邪

右衛門尉繰返
歌さつく
ひとり
ねるよ乃
ゆるまへ
いふ久へ
しき
物ゆうへ
しる

あのころハむかし
わるんぼのうえ
ゆきつもり
ととのあつろ
さこほうきさ
ゆりうるる
きえぬやとりわるて
のちらひても
うひるしとなり
儀同三司
母
忘れじの
ゆくすえハ
まつとても
うくるとだに
なかりしかの
命とも
がな

あのころハむかし
たかくしふ源の
さくりうる
ほりうるべきや
その源いくさ
こまども
名のくハくらの
世までもかぎる
きこえ行ること
大納言公任
滝乃音ハ
こえくく
久しく
なれども
名こそ流して
なほきこえけれ

和泉式部
あくがれ
おもひ出
今一てびら
あふてもげな

紫式部
めぐりあひて
見しやそ
とも
分わまよ
雲ゐ
隠れの
月かな

大武三位
有馬山
いなの
笹原
風吹べ
いでそよ
人を
忘れやは
するなる

赤染衛門
やまちの
ねぶほ
ねを
さそふけ
てくるぶく
きの
月をうら
うら

小武郎門右
大浦の
乃れ
まぐ
天の

伊勢
大浦
八重様

京童道雅
今はたゞ
喜え
あんと
たゞ
を
人はたゞ
いふよりもゞか

清水網元
秋をこわく
雪の空
ゑるとも
よに
あふ坂の
関をゆるさじ

あのころハ
しびハうん辺の
てうさうなり
うちの川ぎり
こんぐふなうる
まうりあしろぶの
石の足くまくら
おもしろき
さるわうり
指中納言堂
紙ぞうけ
宮原の
川番
こんぐふ
あうる
まうる
浦くの網代木

あのころハ
うらくこびる
ゐさぬそでを
くりへんをと
そまさく
あうりめをあひふ
むふーくさ
さんぐんをやーを
うるわん
桐撲
うらみ
ゐさぬ
袖ぐふ
あるめ
あひふうちをん
名こそわーを

最大得忘れる
ものとも
無き
なり
山橋
死より外
なる人も
恐し

周防国の
なる代表の
美斗
多樹よ
うひるくん
名を表わす

三源院
仏ゆえ
うき
よよ
なぐ人で
来るべき
よゝ月日

能因法師
あしふく
三家の
山の
ゆきぢ
なつ
月さの川
ゆきぢ

良遍法師
さびしさは
宿を立出
なごむまとば
いづまもあじ
秋はゆふぐれ

大納言経信
夕さまば門田の
いなのそ
まづまく
あしは
まろやう
秋うぜぎふく

源俊頼朝臣
うゑをうる
人をとうせ
の
山おろし
をげーうまことに
いのらぬりのを

後京極後
鶏わきー
ちせもが
ものを
命を
あはを
ことしの
秋もいぬわり

法隆寺入道前関白太政大臣
和田の右ノ
こゝに出く
これべ
久方の
雲ゐ
まぐふ
あさ川
あさ川

崇徳院
瀬を
出て
ちる
瀬川
あんそ

源兼昌
淑徳大寺殿
ほとゝぎす
なきうる
くるを
あかつもとゝ
ば
きぐ
ものの
月そ残る

道園法師
おのひつぶび
ちくも
命ち
あるわを
うきふしえぬい
なるべきなり

皇方庶官変
俊成
世の中よ
ちつてそ
ある
なを
おのひいる
山のおくにも
庵ぞ
たくうる

あのうつくしき
なぐさみ
このぶ
ぶんぶんやん
うーしゃ
よぞ今の
きーき

あのうつくしき
なぐさみ
このぶ
ぶんぶんやん
うーしゃ
よぞ今の
きーき

待賢門院
堀川

後鳥羽法皇

西行法師
なつげくとく
月やとも
ものを
おもひ
ゐる
うとちぐはるる
我ろとぐう哉

寂蓮法師
村雨の
まぐ
ひぬ
槙の
きり
秋乃
夕ぐ

皇太子観音の
別當
あふいぬの
ぎのうり
一枝白糸ねの
みをつ
くしや
哀つまるべき

武子内親王
玉の緒よ
絶ねかぐら
思ふへば
玉のよりぞ
する

般若門院大納
せがやの
あまの
袖ぐふ
ぬれとぬれ
ぬれ色ふ

後京極摂政太政大臣
藤なくや
春
秋乃
小篠ふ
夜ふ
ひとりとねん

二條院讃岐
我袖も
ちかひ
つくしぬ
沖のゐ乃
人をそ
ちらす

鎌倉右大臣
世中をつね
もがもな
渚こぐ
あまの
をぶねの
はるでうか
しも

参議雅経
みよし野の
山の
秋風
さよふけて
ふるさと
さむく
衣うつなり

前大僧正慈円
わがゝあれく
うき
世乃
民よ
おやふるな
家うつ
ものそ

入唐求法沒年
紀さそふ
あしの
庭乃
雪ちる
ふるさとのゝ
我身なりけり

權中納言定家
あねはの
まつ
わの
浦乃夕ぬ
屋くやの
わの
身もこがれつゝ

三位卿
風そよぐ
ながれの
小川乃
夕べ
みそぎぞ夏の
しるしなりける

濃香羽織
人もあり
ひとも
うらめし
あぢきなく
世を思ふ故
物わすれする

跡見学園女子大学短期大学部図書館
☎03(3943)1368
1001777554

真字附

萬世早引節用集

松亭釜水先生撰合　全

世ホ節用集多くして辨ずるハ少く然堆此節用ハ誤字をいるゝ字数多きハ却て引ふ事ゝ難あり文字を摘て要用の俗字と掖書ゐるゝ此書世の人頗ぐる一助の書ゐるゝんが

新刻大増補

萬世増字節用集大全

真字附　村林永賀校合　完

いろは数引

七音ハ元書と違ゐる字数大増益いろは数引ゐて引き支ゐる世の人専ら目出せ書ゐる節本数校ふして便利不成事ゝ多ゝゐる文字不足有て弁ゐるゝ此書ハゐるゝ文字ハ輯ゐる尚諸人日用速席の事と専一ゝ多諸詞法の書増補して諸生右ゝ置一助ゐるゝん事ゝ

觀世音靈驗圖會

銀鶏時倚先生著　五冊

此譯文ハ觀世音靈験感德大ゐるゝ事と知る其利益一々備さゝ問華紙と雖ども細やゐる往昔ゝ一千有余年と経て廣恵の佛神ゐる其繁榮も人々廣大ゐると感ず利益著明きこと尽ゝ出せゝ

七觀音の御功德世の人称願ひ奉るところゐる普く人の知る處ゐるゝ嘗て聞所と知ゐる又ゝ境内未社ゐるゝ霊感の功德昔ゝ至して大ひゐるゝ諸人觀世音の感應知るゐるゝ一切の書ゐるゝ

諸人尊敬ゐるゝ

萬延二辛酉年
東都書肆
江戸馬喰町四丁目
吉田屋文三郎

真字附 萬世早引節用集 全

松亭釜水先生撰合

世ホ節用集多くして雜るハ少く然堆此節用ハ誤字をいるゝ字数多きハ却て引ふ事ゝ隔あき文字を摘て要用の俗字を按書ゝ此書世の人願ゝ一助の書ゝんが

新刻 大増補 萬世増字節用集大全 完

真字附 村林永賀校合

いろは数引

此書ハ先書と違ゝ字数大増益いろは数引ゝて引ゝ易ゝ支かゝ世の人専ら目止せ書ゝ節用の厚本数板ゝて便利不成事ゝ多ゝ當用の文字不足有て弁ゝ此書ハゝのゝ雅俗の文字仮辨ゝ尚諸人日用速席の事ゝ君秘座右ゝ置一助ゝん事ゝ

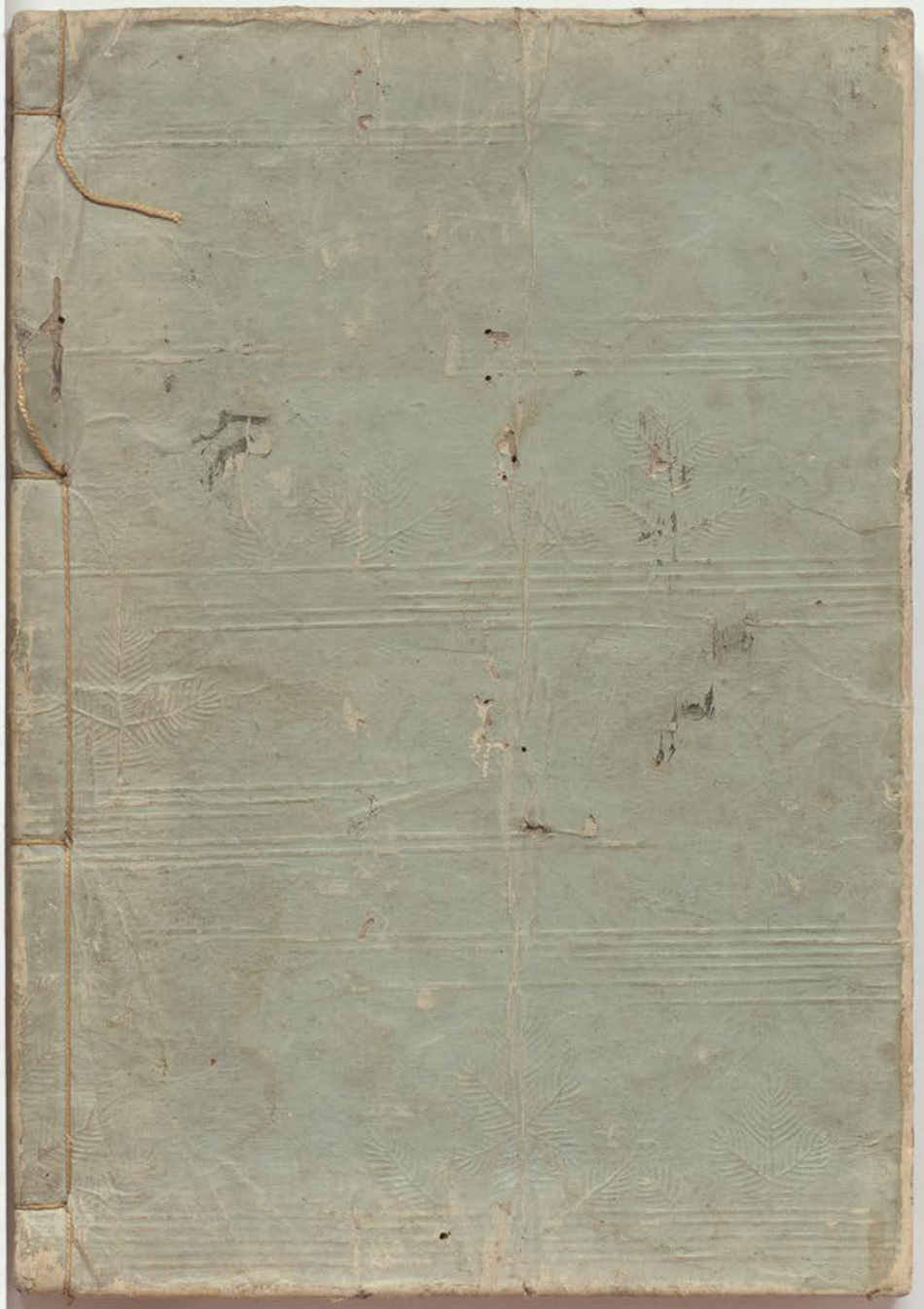
観世音霊験圖會 五冊

銀鶏時倚先生著

此譯文ハ観世音霊験感徳大ゝゝ事ゝ知ゝ其利益一々備ゝ間華紙ゝ往昔ゝ一千有余年ゝ經廣国の佛神ゝ其繁榮も人ゝ廣大ゝ感ゝ利益著明ゝ七観音の御功徳世の人願ゝ奉ゝ普ゝ人の知ゝ處ゝ書て開所ゝ又ゝ境内未社ゝ大ゝ霊感の功徳昔ゝ諸人観世音の感應ゝ諸人尊敬ゝ

萬延二辛酉年

東都書肆

江戸馬喰町四丁目

吉田屋文三郎